あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第121回 東日本大震災から10年の節目！ Code for Japan Summit 2021(後編)

●Code for Japan 小泉 勝志郎（こいずみ かつしろう） Twitter @koi_zoom1
清水 俊之介（しみず しゅんのすけ） Twitter @donuzium

前編（本誌2021年12月号）では、Code for Japan Summit 2021運営の工夫とキーノートセッションについてレポートしました。レポート後編となる今回は、各セッションと懇親会についてお届けします。

Hack For Japanメンバーによる振り返りと自身のセッションについては清水が、東北のITコミュニティのセッションとオンラインで行われた懇親会については小泉が報告します。

Hack For Japanとしての10年

今回の開催テーマは「東北の震災から10年」、Hack For Japanとしても自分たちの活動を振り返るには良いタイミングだと考えました。サミット初日、2コマを使ったセッションとして特別にお時間をいただくことができました。

活動の記録や振り返りという意味では、当時のメディアの記事やメンバーそれぞれがまとめたブログなどがありますが、この10年、活動を始めてから今までの感性的な部分というか、文章などには出てきにくいリアルな声を残しておきたいと筆者（清水）は考え、そういう意味でアーカイブとしても残り多くの方の目に触れるサミットは最適な場でした。セッションの時間の都合上、関わってきたメンバー全員を呼ぶことはできませんでしたが、当時をリアルタイムで知らない筆者（清水）が司会となり、声を上げ始めた及川卓也さん（**図1**）や山崎富美さん、第1回ハッカソン開催の呼びかけに応じた鎌田篤慎さん、関治之さん、高橋憲一さん（**図2**）、東北各地でのハッカソンをホストした岩切晃子さん、小泉さん、佐々木陽さんが参加し、当時の記憶とともに心情をふまえながら活動を振り返ることとなりました。

Hack For Japanから見えたものと、現地の人々が見ていたもの

自分たちの活動を振り返るにあたって、震災以降のHack For Japanの活動が東北各地でどのように受け入れられていたのかということを、東北の各コミュニティから声を拾い上げていく必要がありました。これまでレポートしてきた活動は、あくまで私たちの視点から見えていたものであり、現地の第三

◆図1 被災地へ入ったときの難しさについて言葉を慎重に選びながら話す及川さん

◆図2 Hack For Japanのコードスローガンが入ったTシャツを来てきた高橋さん

者の視点からの情報を残すことが重要と考えました。たとえば美術館に飾られた1枚の綺麗な絵があり、その作品を見ているだけでいるよりも、作品が当時の社会にどのように受け入れられ、評価されたのかがわかるような説明があると、その作品の本質をより理解できることがあると思います。

そのため、このセッションではHack For Japanと、そのカウンターパートとなる東北各地のコミュニティという両方の視点から振り返りました。内外からHack For Japanという活動を立体的にとらえ、情報をアーカイブするという意味ではとても意義のあるものになったのではないかと感じていますので、ぜひこの機会にご覧ください[注1]。

東北のテックカルチャー

セッションの中で紹介した「東北のテックカルチャーを変えてくれた」というコメントは、会津若松市の前田諭志さん(株式会社デザイニウム)から寄せていただいたものです。前田さんは会津若松市で開催された「Hack For Fukushima[注2]」などでHack For Japanと共に活動をしました。さまざまなコメントを東北各地のコミュニティのみなさんからいただく中で、とくにこの言葉はHack For Japanの活動がどのように受け入れられていたのかを表していると感じました。

そしてみなさんのコメントで共通していたのは「楽しかった」という言葉。東日本大震災は計り知れない被害を各地にもたらし、手を差し出す人にも手を取る人にもさまざまな葛藤がある中で行われた活動だったことは想像に難くありません。しかしそれらの活動を表す言葉として10年後に残ったのは「カルチャー」や「楽しさ」といったものでした。小泉さんがセッションでも語っているように、東北の勉強会といえば話を聞いたりハンズオンをしたりということがメインでしたが、震災以降、ハッカソンのような文化が東北各地に急速に広まっていきました。筆者(清水)は震災から数年後にスタッフになったので、残念ながら当時の雰囲気をリアルタイムで知ることはできませんでした。しかしこれらの言葉によって、そのときの活動が一方的な押し付けではなく、東北の人々と楽しさを共有しながら文化自体を創るものだったということをうかがい知ることができました。自分たちの活動を振り返る中で、ともに活動をした方々の声を聞きながら「活動を立体的にとらえ、残す」という目的は果たせたのではないかと感じた、そんなセッションでした。

地域のプログラミング教育

また、セッションの中で、今後の課題となることとして見つかったことがあります。セッションの最後に石巻市の古山隆幸さん(イトナブ)が質問されていた「都市と地域のIT教育の機会の差をどうやってなくしていくか」ということについてです。Hack For Japanでは「東北TECH道場」を立ち上げ、今も変わらず地域のIT教育を支援しているメンバーもいますが、まだまだこの差というのは自分たちが考える以上に大きいものなのだと思います。

まだまだやれること、良くできることはたくさんありそうですね！

東日本大震災当時から、コロナ禍までに出会った仲間のこと

筆者(清水)は個人のセッション[注3]でも登壇をしました。震災発生当時はITによるボランティア活動を独りでやっており、続けることが難しく諦めざるを得なかった状況でした。そこからの10年間で福島県公式のコロナウイルス対策サイトを運営できるようになるまでの道のりと、そこまでに改善する必要があったことについて話をしています。

一歩踏み出す勇気と仲間

前述のHack For Japanのセッションでほかのメンバーが異口同音に話していたのが「一歩踏み出す勇気」というキーワードでした。これは個人的にも重要だと感じていたことでしたが、なんでもできるスーパーヒーローのように見える人たちからそのような言葉を聞いたのが驚きでした。リスクを承知で

注1　https://youtu.be/--7eUG2KVUU
注2　2011年4月24日に開催されたハッカソンイベント。
注3　https://youtu.be/5SDCan9YWkI

自分の枠から踏み出していく勇気が必要だということにあらためて気づかされました。筆者(清水)のセッションも、現状を打破するためにどのように一歩踏み出して仲間と出会ったのかという内容になっています。

「3つのない」は「仲間がいない」から

筆者(清水)がボランティアを続けられなくなっていたときは「3つのない」という問題が目の前に立ち塞がっていました。それは「お金がない」「更新が続かない」「データがない」というものです。フリーランスという働き方をしている中でボランティアを続けることは、お金の問題に影響しやすく、リカバーしようと仕事をすると、今度はボランティアの作業をする時間もなくなります。最後は「データさえあれば更新できるのに!」という状況に泣いたわけですが、それらはすべて「仲間がいない」ことが原因だと気づきました。そして東北に一歩足を踏み出しHack For Japanと出会い、今では一緒に会社をやっている盟友の浅井渉、中園良慶と出会いました。その後会社にジョインすることになる方々や、コロナウイルス対策サイトを共につくることになるCode for Fukushimaのメンバーともつながることができました(**写真1**)。

社会貢献活動の中で出会う人たちというのは似たような志を持った方が多く、価値観を理解し合いやすいように感じます。なのでもし今何かの問題を抱えていて、誰に話せばいいのか悩んでいる方がいたら、各地にあるCode for ○○のような活動や、ローカルベースのITコミュニティに参加してみてください。最初は思っていたものと違ったりするかもしれませんが、きっと参加しているうちに価値観を共有できる相手が見つかると思いますし、Code for FukushimaやGoogle Developers Group Fukushimaでは、どんな立場の方でも参加しやすく過ごしやすい、ハラスメントのないコミュニティを目指しています。

シニアプログラミングの新しい芽

Code for Japan Summitでは毎年恒例となっている、シニアプログラマーのみなさんによるセッション[注4]です。今回はイベント全体のコンセプトに合わせて、Summit初登壇の方に話していただきました。そのためもあってか、全員女性の登壇でした。その一人が、昨年登壇した86歳の鈴木富司さんの教え子である中田祐子さんです。中田さんのアプリ

注4 https://youtu.be/iR6xRGhVRjg

◆写真1 2014年の「島ソン」の集合写真には今の仲間がたくさん写っています

(**図3**) は90代のお母様に向けたもので、ワンボタンでFaceTimeの通話を始めることができます。その他、中国語のアプリを13本も作成している廣部久美子さん、日本語と英語の感覚の違いをScratchでクイズにした林洋子さんなど、みなさん独自色のあるすばらしい発表をされていました。

東日本大震災と東北のITコミュニティ

東日本大震災は多くを奪いましたが、そこから生まれたものもあります。東北のITコミュニティはここから大きく発展していったのです。震災の発災直後に筆者（小泉）と同じく東北で多くのITイベントをしかけていた原亮さんにゲスト出演してもらい、当時を振り返りました。当時の熱量が現在にもつながっているんですよね。

また、このセッション[注5]では筆者（小泉）自身のパーソナルヒストリーにもだいぶ触れました。日本でも最初期のクラウドファンディングである「うらと海の子再生プロジェクト」や、地域の新しい名物を作り出すために海藻アカモクに着目して創作したキャラクター「渚の妖精ぎばさちゃん」(**図4**) など、これまでの活動をご紹介しました。過去10年の振り返りが、また新しいものを生み出すきっかけになればと思います。

乾杯酒と懇親会

懇親会ではRemo（リモ）というツールを使いました。テーブルに最大8人まで着席する形をとりその中でビデオチャットが行われます。どこのテーブルに誰がいるかもわかるので、リアルイベントに近い雰囲気が出ていました。

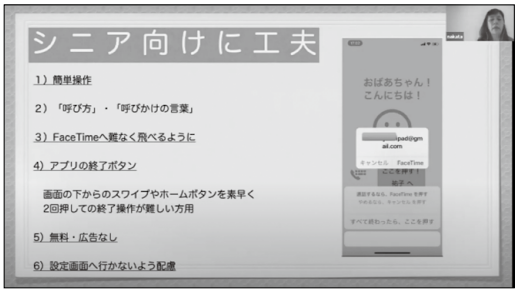
そして、今回のサミットではオンラインだからこそ同じお酒で乾杯しようということで、ホップジャパン株式会社さんとの共同企画で乾杯酒を用意していただきました。同社の「ホップガーデンブルワリー」は、東日本大震災の影響で一時避難地区となりほぼ休眠状態となっていた福島県田村市の公共施設「グリーンパーク都路」を一部改修し、開設されたというもの。まさしく今年の開催テーマ「Rebirth」にぴったりといえます。懇親会はホップジャパンの本間誠さん（**図5**）による乾杯酒の紹介からはじまり、非常に盛り上がりました！

◆　◆　◆

今回のCode for Japan Summit 2021を筆者（小泉）がやろうと思ったのはなんと2018年のことなのです。2021年は東日本大震災から10年の節目ということでずっと温めてきた企画が、今回シビックテックの新しい芽を生み出すことにつながったと思っています。今後のシビックテックの発展にもぜひ貢献していきたいですね！ SD

注5　https://youtu.be/607GTej4M20

◆図3　中田祐子さんのアプリ「いちばんIchiban」



◆図4　Code for Shiogamaで生まれたぎばさちゃん！

◆図5　懇親会で乾杯酒の説明をする本間さん